

《報告》

一茶の発句「とぶ螢卵の殻をかぞへるか」考

後藤好正

神奈川県横浜市港北区新羽町 675-202

はじめに

江戸後期の俳人小林一茶は、生涯に詠んだ約2万2千句の発句を残しており、ホタルを詠んだ句も200句余りが知られている。そのうちのひとつに文化11年に詠まれた「とぶ螢卵の殻をかぞへるか」(『七番日記』)がある。句意は「飛んでいる螢は卵の殻を数えているのだろうか」と明瞭である。しかし、なぜホタルが卵の殻を数えるのかについての解釈は難しい。一茶の句は数が大変多いため、解釈のなされていない句も少なくない。本報では一茶が、ホタルが卵の殻を数えると詠んだ意味について若干の考察を行う。なお、詩歌で詠まれたホタルの多くはゲンジボタルであり、表題句の「螢」もゲンジボタルとして論をすすめる。

一茶の句は『一茶全集第一巻発句編』から引用した。掲句に対し異形句とみられる句は、その句型を異の次に上五・中七・下五の別に示した。

一茶以外の引用句については、漢字の旧字体は通用字体に改め、濁点は補った。踊り字はそのままとしたが(く)については/ \ と表記した。

ホタルの漢字表記は螢に統一し、引用文中の改行は/ で示した。

1. ホタルと卵は結びつくか

1-1. 実景句の検討

一茶記念館学芸員の渡辺洋氏は表題句の通釈はないが私見として、「卵の殻を砕いて肥料として撒いてあるところをゆらゆらと螢が通りすぎていくのを、殻の数を数えているように見えると表現しているのではないかと感じます」との解釈を示された(渡辺, 私信)。

雄のホタルが雌を探してゆっくりと上下しながら飛ぶ様子を、一茶が何かを数えていると見立てたのは間違いないが、ではこの句は実景を詠んだものだろうか。

前記解釈の場合、一茶の詠んだ卵は鶏卵ということになる。鶏は古く日本に入ってきたが、卵が食べられるようになるのは江戸時代になってからである。当時は、農民が庭先で放し飼いにしている鶏が産んだ卵が売られる程度で、採卵を目的とした養鶏が行われるのは江戸後期のことである。これまで、江戸時代に卵殻を肥料に利用したという具体的な記録を見ることはできていないが、もし肥料にしたとしても、農民が自己消費した殻を他の肥料と混ぜ合わせて用いたくらいと考えられる。また、肥料として利用するさい卵殻は細かく砕かれたと考えられるので、それを目にしたとして卵の殻だと認識できたかという疑問が残る。

さらに当時の卵の色の問題がある。今日では卵の色というと白色というイメージが一般的であるが、白い卵を産む品種は明治以降に日本に導入されたもので、江戸時代に飼われていた在来種の卵の色は現在赤玉と呼ばれる赤味がかかった茶色であった。そうすると、ホタルの活動時間帯である夜は地表に卵の殻があったとしても気づけなかったであろう。

以上の点から、表題句が実景をもとに詠んだ可能性は低いと考えられる。

1-2. 生物学的検討

鶏卵の他にホタルと卵の関わりで思いつくのは、ホタル自身の卵である。ホタルは卵 → 幼虫 → サナギ

→成虫という生活史を送る完全変態の昆虫であり、ここで詠まれている卵をホタルの卵とすることはできない。筆者の知人何人かにこの句の「卵」について意見を求めたところ、やはりホタル自身の卵という答えが真っ先に返ってきた。しかし、表題句をホタル自身の卵を詠んだとする考え方は、ふたつの点から現実的ではない。

ひとつはホタルの生態である。ゲンジボタルは東京近郊では5月下旬から成虫が発生する。産卵後、幼虫が孵化するまでに約1ヶ月ほど要するのに対し、成虫の平均寿命は京都市清滝で雄3.3日・雌5.7日、横浜市で雄3.6日・雌2.5日と報告されており（大場，1988）、幼虫の孵化後まで生き残っている成虫はほとんどない。また、卵の大きさも約0.5mmであるので、野外で探すことは困難である。

もうひとつは、当時の日本人のホタルに関する知識である。明治時代に西洋科学が導入されるまでの日本人は、湿熱の気によって腐った草がホタルに変化すると考えていた。これは中国の『礼記』（月令）に記載されていたもので、平安時代には日本に伝わっていた。平安時代の歌集『堀河百首』には、この発生説に基づいた次の2首が載っている。

五月雨に草のいほりはくづれども螢と成るぞうれしかりける 大江匡房
さみだれに草くちにけり我がやどのよもぎが朶に螢とびかふ 源師時

江戸時代になると日本の季節に合うように改編された農事暦『本朝七十二候』によって、一般にも広く知られるようになる。本草学でも、中国明代の李時珍が著した『本草綱目』に従ってホタルを化生類に分類しているが、それは幕末に到っても変わらなかった。一茶にも

酒は酔に草は螢（ホタル）に成にけり 八番日記（文政4年）

という句が残されており、一茶もホタルを腐った草から生じる化生類と認識していた可能性が高い。つまり、当時の人はこの句をみてホタルとホタル自身の卵を結びつけることはなかったのである。

1-3. 文学的検討

次に文学の視点からホタルが卵と結び付くかを探ってみたい。

江戸時代は古典が庶民に開放された時代でもある。『源氏物語』『伊勢物語』『うつほ物語』といった物語文学をはじめ、『枕草子』『徒然草』『方丈記』（随筆文学）、『今昔物語』（説話文学）、『平家物語』『太平記』（軍記文学）など、さまざまな作品が出版されている。

一茶も職業俳諧師として俳書はもとより、和歌・狂歌・物語・日記・紀行・説話集・詩文などの文学をはじめ、名所記・経史・神仏書・謡曲・狂言・本草・卜占・地理・風俗・歴史・辞書・雑芸など和漢の多方面にわたって目を通していたことが自筆資料類から窺える（前田・1990）。

実作にも『源氏物語』「若紫」で、光源氏が幼い少女を垣間見する場面を踏まえた

恋猫の源氏めかする垣根哉 文化六年句日記（文化6年）

や『土佐日記』の冒頭「男もすなる日記といふものを…」をもじった

節氣候を女もす也それも御代 七番日記・志多良（文化10年）

など、古典を取り入れた作品がある。

古典の代表『源氏物語』では、光源氏が養女玉鬘の容姿をホタルの光で浮かび上がらせる場面で知られる「螢」の他、「帯木」「夢の浮橋」ではホタルが飛ぶ情景が描かれ、「夕顔」「薄雲」では比喩として用いられ、「少女」では螢雪の功の故事が使われている。また『源氏物語』と並んで俳諧に詠まれた『伊勢物語』にも39段、45段、87段でホタルが登場する。物語文学ではこの他に『竹取物語』『うつほ物語』『大和物語』、中世王朝物語の『あきぎり』『夢の通ひ路物語』で、情景描写のほか比喩や故事としてホタルが現れる。しかし、いずれも卵との関連は認められない。

中世の説話文学や軍記文学、随筆・日記文学、江戸時代の浮世草子・洒落本・草双紙などホタルが出て

くる作品は少なくないが、筆者の調べた限りでは卵との関連は見られない。また、一茶に先行する俳諧作品を始めとする詩歌、能の詞章である謡曲や人形浄瑠璃等の義太夫節などの謡本でも同様である。

1-4. 民俗学的検討

最後に民俗学を見てみたい。ここで対象となるのは民話、わらべ唄、俚諺、謎など口頭伝承である。

民話は伝説・昔話・世間話からなる。一茶には

狙も来よ桃太郎来よ草の餅 文化句帖（文化2年）

勝声や花咲翁が菊の花 文化句帖（文化11年）

など「桃太郎噺」や「花咲か翁」を踏まえた句もあるが、これらの昔話は江戸時代に草双紙などで広く知られた話であるため、句を見た人はすぐにイメージできた。ホタルの民話にも、広く知られた宇治川の「源頼政の螢合戦」のように、俳諧に数多く詠まれた伝説もある。しかし、これまで筆者の目に入ったホタルの民話は、いずれも地域性が強いゆえに卵と結びつけられた話はない。また、諺や謎についても同様である。

次にわらべ唄である。ホタルを歌ったわらべ唄の多くは螢狩りの時に歌われる「螢狩の唄」であり、日本各地でさまざまなタイプの唄が歌われている。その中で江戸時代に喜田川守貞が記した随筆『守貞漫稿』に「飛螢を観て京坂の男女云詞、蓋京坂の童は螢をほうちと云／ほうちこい、落ちたら玉ごの水のまそ」と、京阪地方の「落ちたら玉子の水のまそ」と誘う螢狩の唄が記されている。

北原白秋が日本各地のわらべ唄をまとめた『日本童謡集成』には、この型の唄が大阪府と兵庫県から5例記録されている。その中には「ほうち、来い来い、落ちたら玉子の水飲まそ〔大阪〕」と守貞が記した唄に近いものも記録されている。残りの唄は

○ほうほう螢来い、あっちの水は苦いぞ、こっちの水は甘いぞ、落ちたら玉子の水飲まそ。

（類歌）☆きったら玉子の水やるぞ〔大阪兵庫〕

○ほうほう、螢来い、ぶんぶくしょう、屋根のむねからころんでこい、

おちたら玉子の水のまそ、あっちの水は苦いぞ、こっちの水は甘いぞ。〔兵庫〕

○螢来い、来い来い、螢むしの高あがり、降りたら玉子のぶい吞まそ、

柳のずんどうつとうてこい。〔兵庫〕

で、「あっちの水」型と混合した唄や、兵庫県の螢狩の唄によく見られる「柳」が歌詞に取り入れられたものである。

他のわらべ唄の資料からは、兵庫県の播磨地方や但馬地方ではこの型の唄は記録されておらず、上記の兵庫県は旧摂津国の範囲を指すと考えられるので、この型の唄は大阪を中心として歌われていたようである。また、京都地方のわらべ唄集にはこの型の唄は見られず、幕末以降早い時代に歌われなくなったのかも知れない。一茶は寛政4(1792)年から寛政10(1798)年まで、あしかけ7年西国行脚をしていて、寛政4年の夏は大阪周辺にいたので、そのさい耳にしたことが考えられる。しかし筆者は、一茶が幼少時この型の唄を耳にしていたか、あるいは歌っていた可能性があったのではないかと考えている。『日本歌謡集成』には長野県下高井郡の動物の唄として、「螢来い宿かせる、山ぶし来い宿かせる、落ちたら玉子の水くれる」が載る(高野、1960)。この歌は長野を中心に新潟・群馬・岐阜・愛知で歌われていた「山伏来い宿かせる」型と「玉子の水くれる」型が習合した唄である。下高井郡は一茶の故郷である上水内郡柏原村に近い地域であり、柏原村でもこの唄が歌われていたことは十分に考えられるのである。

『守貞漫稿』の著者喜田川守貞は大坂の人で、天保11(1840)年に江戸に移住した。江戸と上方の風俗の違いに興味を持った守貞が、天保8(1837)年から書き綴った風俗百科が『守貞漫稿』で、螢狩の唄も江戸ではまったく違う唄(おそらく「山路来い」型であろう)が歌われていたためわざわざ記したものである。守貞は江戸に移るまでは、京坂で歌われていた唄がどこでも歌われている唄だと思っていたのかもしれない。

螢狩の唄はさまざまなタイプの唄が歌われており地域固有性・多様性が高いが、研究者でもなければ幼少時に歌っていた唄を大人になって他地域と比較することはまずない。一茶も「玉子の水を飲ます」という歌詞が長野県北部と京阪地方にのみ歌われている唄とは思わなかったであろうから、地域固有性の強い螢狩の唄の歌詞を句に取り入れても不思議ではない。

2. 「飛螢卵の殻をさがすのか」句の解釈

一茶の句には小動物や子供など弱者への愛情や同情を表したものが多いのも特徴とされる。人口に膾炙した句にも

| | |
|-----------------|---------------|
| やれ打な蠅が手をすり足をす | 梅塵本八番日記（文政4年） |
| 雀の子そこのけ / お馬が通る | 八番日記（文政2年） |
| 瘦蛙まけるな一茶是に有 | 七番日記（文政13年） |

などの句がある。ホタルを詠んだ200余りのなかにも、

| | |
|--------------|------------|
| 二三遍人をきよくつて飛螢 | おらが春（文政2年） |
|--------------|------------|

のように、螢捕りに来た人の手や団扇が届く少し先を飛び去る様子を、まるでホタルが人を馬鹿にしているようだと思わせる句がある。「きよくつて」は、からかう、馬鹿にするの意である。

江戸時代の発句で、届きそうで届かないホタルを詠んだ句としては、

| | |
|-----------------|---|
| わんぱくのあたまのうへやゆく螢 | 蓮之（『俳諧古今句鑑』素外編、安永6年） |
| 男なら団扇のとどくほたる哉 | 歳々（『俳諧友あぐら』沾州編、享保20年） |
| 最ちつとで螢へたらぬ団扇哉 | 也有（『蟻づか』也有著、明和7年成） |
| 手届をついとそれたる螢かな | 若村（『卯花筐』 <small>うのはながたか</small> 為卜編、寛政8年） |

などがある。いずれも人の視点から詠まれており、ホタルを捕まえることができなかつた悔しさが滲み出ていて、前出「二三遍…」句とは対象的である。

表題句「飛螢…」は、一茶がホタルが飛ぶ様子を何かを数えていると見立てた時に、思い浮かんだのが前出の唄で、卵の殻を数えていると作ったのである。そして、ホタルを捕るために「落ちたら玉子の水くれる」と歌う人達の詞を信じ、他のホタルが水を貰った後の卵の殻を探すホタルを哀れんでいるのである。同じように

| | |
|-----------------|------------|
| うそ呼としらざに行かはつ螢 | 文政句帖（文政7年） |
| 行な / みなうそよびぞはつ螢 | 文政句帖（文政7年） |

の句でも、「玉子の水」や「甘い水」など貰えず、かえって捕まってしまうのに、騙されて呼んでいる人へ向かって飛んでいくホタルを哀れむ。

筆者はこの句を、「何かを数えているように飛んでいる螢がいるなあ。おまえは人がくれると歌う「玉子の水」が入っていた殻を数えているのか、そんなものあるはずなのに」と解釈したい。

3. 螢狩の唄を踏まえて詠まれた一茶の発句

一茶にはわらべ唄の歌詞を取った句がある。たとえば、天体気象の唄の「大寒小寒山から小僧が泣いてきた」の文句取り

| | |
|----------------|------------|
| むら時雨山から小僧ないて来ぬ | 七番日記（文化8年） |
|----------------|------------|

や、子守歌・口遊歌の「お月さまいくつ、十三七つ…」の文句取り

| | |
|------------|------------|
| 青梅も十三七つ月よ哉 | 七番日記（文化9年） |
|------------|------------|

がそれである。しかし、門人可侯が詠んだ

行螢あちらの水がうまひやら 三韓人（一茶編，文化11年刊）

のように、螢狩の唄の歌詞を直接詠み込んだ作品は見当たらない。

螢狩の唄はホタルを呼び寄せるための唄であることから、唄を歌ってホタル誘う行為を「よぶ」と表現した句は、

こい / \ と呼べど螢がとんでゆく 鬼貫（『仏兄七久留万』鬼貫著，享保13年成）
 螢よぶ寝言かましや蚊やの中 可楽（『柿表紙』吾中編，元禄15年）
 来ぬはずよ歯のなき口に呼螢 五明（『春秋稿編次外』葛三編，寛政8年）
 呼ば来る螢や何が淋しくて 五芳（『世美塚』白老編，文化10年）
 よべば来る孫には劣るほたる哉 太橋（『俳諧発句あづまぶり集』涼谷編，文政11年）

などがあり、螢狩の唄を踏まえた句は必ずしも文句取りの句ばかりではない。一茶にも同様に「よぶ」と作られた句をはじめとして、螢狩の唄を踏まえて作句された句が見られるのであわせて紹介しておく。なお、一部の句は後藤（2016）で紹介しているが再度取り上げた。

鼻や螢 / \ を呼ぶように 七番日記（文化7年）

は、フクロウの「ホー、ホー」という鳴き声を、螢狩の唄で多い歌い出しの頭韻「ほーほー」に掛けた句である。

はつ螢其手はくはぬとびぶりや おらが春（文政2年刊）

異 上五下五「飛螢…くわぬとや」（『おらが春』、上五下五「^{とびごま}鋸声の…螢かな」（『八番日記』文政2年）
 「其手」は螢狩の唄で呼び寄せようとする行為のことである。一茶は人を避けて飛ぶ様子を、その手には乗らないとばかりすいと逃げる、と見るのである。

螢よぶうしろにとまる螢かな 文政句帖（文政6年）

螢よぶ口へとび入るほたる哉 七番日記（文化9年）

呼んでいる人の、体の後ろに止まったり、口の中に飛び込んだりと、まるで人をからかっているかのようなホタルで、前出「二三遍…」句にも通じる。「螢よぶ口へ…」句は上五が「鶯よぶ」と記されているが「螢」の誤記である。

ほたるよぶよこ顔過るほたる哉 書簡（寛政10年）

この句を詩人の宗左近は、「構成に二重性がある、これは一種の俳句の革命といえます。／＼そもそも「ほたるよぶ横顔」と、人を横顔で捉えているのが、それまでの俳人にはなかったことであって、珍しい。しかも、その「横顔」を、呼ばれたのではない螢が横切って明るませる、その視点の運動と、その明るさの轉移。まことに鮮烈な爽やかな新しさ。前衛映画の一齣を見る思いがします。凄く現代性がありますね」と評している（宗，2000）。

あちこちの声にまごつく螢哉 七番日記（文政1年）

異 上五「方/\の」（『文化句帖』文政7年）

呼声をはり合に飛螢哉 八番日記（文政3年）

「あちこちの」句は、あちらからもこちらからも聞こえる子供達の歌声に、ホタルがどこへ逃げようかとまごついていると詠むが、「呼声を…」句では子供達の呼ぶ声に捕まるものかと張り合って、いよいよ高くあるいは早く飛ぶホタルである。同想の句に梅室の「あちこちに呼ばさまよふ螢かな」（『梅室家集』自撰，天保10年）、暁台の「いふことのきこえてや高く飛ほたる」（『暁台句集』臥央編，文化6年）がある。

念物の口からよばる螢哉 七番日記（文化8年）

念仏は浄土系宗派で唱えられる「南無阿弥陀仏」である。一茶の故郷である柏原村は熱心な浄土真宗の地で、一茶も信徒であった。寛政4年からの西国行脚では、父弥五兵衛から西本願寺への代参を頼まれてもいる。玉城（2013）はホタルを呼んでいるのを僧とみて、「崇高な念仏と子ども時代を思い出させる螢狩

の呼び声と同じ僧の口から出てくる、そのずれが楽しく暖かい」と解説している。筆者は、一茶が来世を願って熱心に念仏を唱えながら、一方では楽しみのためにホタルを呼び寄せ捕まえるための螢狩の唄を歌うという人の性をみていると考えたい。

子ありてや橋の乞食もよぶ螢 七番日記（文化8年）

橋の乞食がホタルを呼んでいるのは、子供にねだられたからなのだろう、一茶はそこに「我が子への愛」を見ている。

わんぱくや縛れながらよぶ螢 七番日記（文化13年）・おらが春

腕白小僧が悪戯をして柱に縛り付けられている。日が暮れてホタルが飛び出すと、そんな状態でもホタルを一生懸命呼んでいる子供のたくましさ詠む。同じ年に上五を「泣蔵なみくらや」とした句形もある。

妹が子やじくねた形りよぶ螢 七番日記（文化12年）

乳呑子や見よふ見まねによぶ螢 文政句帖（文政7年）

「妹が子や…」句の「じくねた」は「すねる」の俗語で、一生懸命呼んでも一向にホタルが寄ってこないで拗ねているのだろうか。「乳呑子…」句は母親かあるいは兄姉に背負われてやってきた乳飲み子の、一生懸命他の子供達のまねをしてホタルを呼んでいる様子である。一茶と同じ時期に越後（現新潟県）に住んでいた曹洞宗の禅僧で歌人・漢詩人・書家の良寛に

さわぐ子の捕る知恵はなし初ほたる 遺墨

という句がある。谷川（2000）はこの句の解説で、「良寛は、幼い子の初ほたるに対する関心と興奮をもっともだと肯定しながらも、幼い子がまだ大人の残酷な知恵を持ち合わせていないことに、ほっとしたのだろう。初ほたるについては、小林一茶に次の句がある。／初螢その手はくはぬ飛びぶりや／初螢ついとそれたる手風かな／どちらの句も、人間の狡猾さに、初ほたるが負けなかったというのであろう。そこに一茶の持つ強者に対する揶揄の思いがでている。それに競べると、良寛の句には屈折した心情は見られず、素直で安らかである。ここに両者の違いがあろう」と一茶の句との違いを述べているが、掲出句2句はまだホタルを捕ることができない幼い子供ゆえに、一茶も微笑まじげに見ているように感じる。

行け螢とく／＼人のよぶうちに 七番日記（文化11年）

異 上五中七「大螢行け／＼人の」（『発句題叢』文政3年）、「初螢行け／＼人の」（『希杖本一茶句集』）

掲句のように、「人が呼んでいるうちに早く行け」とホタルに呼びかけるのは少し異色である。「呼ばれるうちが花、さっさと行かないと誰も呼んでくれなくなる」というのは、ホタルに一茶自身を投影しているからだろう。

瘦螢も誰やらよべる也 文化句帖（文化3年）

瘦せたホタルだが、こんなホタルでも誰かが呼んでいる。一茶には同年に詠まれた「瘦螢大舟竿にかゝる也」「瘦螢小野の花殻流れけり」（『文化句帖』）や文政2年の「瘦螢ふはり／＼とながらふも」（『八番日記』）と「瘦螢」を詠んだ句がある。実際には、ホタルは体の大小はあっても「瘦蛙」のように瘦せたホタルというのではない。あるいは、掲句の「瘦螢」も一茶自身をかさねたものか。

なゝ呼ぞよべばよぶ程来ぬ螢 文政句帖（文政6年）

木母寺きもてらや犬が呼んでも来る螢 七番日記（文化10年）

田所や馬がよんでも来る螢 七番日記（文化11年）

「なゝ呼ぞ」は禁止の「な…そ」の名残による方言で、「呼ぶな」の意。「呼ぶんじゃない、ホタルは呼べば呼ぶほど来ないのだから」と詠む一方で、後の2句はホタルが飛ぶ様子を、犬や馬でも呼ばればやって来ると見立てることによりおかしみを生んでいる。2句目の木母寺は、一茶が江戸で居を構えていた東京都墨田区にある天台宗の寺院で、「梅若伝説」が伝わる。

又一ツ川を越せとやよぶ螢 文政句帖（文政8年）

川を横切って来たホテルに対し、まだ遠いからもう一つ川を越してこちらへやって来い、と呼びかける。

青柳や螢をよぶ〔夜〕の思はるゝ 文化句帖（文化1年）

青柳ややがて螢をよぶところ 文化句帖（文化1年）

螢よぶ夜のれうとやさし柳 文化句帖（文化1年）

文部省唱歌「螢」（井上赳作詞，下総暁一作曲）に「螢のやどは川ばた楊」と歌われたように、ホテルとヤナギは相性が良い。これはホテルが発生する川辺にはカワヤナギやネコヤナギが自生するほか、町中の水辺や水路沿いにシダレヤナギが植えられたことによる。ホテルにヤナギを取り合わせた図柄は、のれんや扇子、サマーポストカードなどで見られる。

掲句はいずれも「柳」が季語で春の句。前の2句は青々と茂ったヤナギを見て、一茶は「ここも夏になってホテルが飛び出すと、子供達がホテルを呼ぶようになるのだなあ」とやがて訪れるホテルの運命に想いを馳せる。3句目の「れう」は「料」で何かを使うために必要なもののこと。「さし柳」は挿し木した柳、あるいは挿し穂として地に植えた柳で、一説には芽吹きしたヤナギともいう。「子供達が螢を呼ぶ夜の道具になってしまうのだろうか、このさし柳も」、そして初夏になると「さし柳螢とぶ夜と成にけり」（『七番日記』文化8年）となる。

おわりに

本稿では一茶の句「飛螢卵の殻をかぞえるか」を取り上げ、「ホテルが卵の殻を数える」という表現は螢狩の唄の歌詞「玉子の水くれる」に基づいていると推定した。また、一茶の句の特徴のひとつ、弱者に寄り添った句であるとの見解を示した。あわせて、一茶が螢狩の唄を踏まえて詠んだ句を拾い出し紹介した。

謝 辞

一茶記念館学芸員の渡辺洋氏には筆者の問い合わせに対し、丁寧な回答をいただいた。特に表題句の解釈を示していただいたことは、筆者が実景句の可能性を検討するきっかけとなった。深く感謝申し上げます。

引用句出典一覧

- 飯田正一他校注（1972）仏兄七久留万。談林俳諧集二 古典俳文学大系 4。集英社。
 勝峰晋風編（1927）蟻つか。中興俳諧名家集 日本俳書大系 9。日本俳書大系刊行会。
 勝峰晋風編（1927）世美塚。近世俳諧名家集 日本俳書大系 13。日本俳書大系刊行会。
 丸山一彦・小林計一郎校注（1970）三韓人。一茶集 古典俳文学大系 15。集英社。
 正岡子規編（1992）分類俳句大観 5。日本図書センター。
 宮田正信・鈴木勝忠校注（1972）梅室家集。化政天保俳諧集 古典俳文学大系 16。集英社。
 中根誠編著（1982）俳諧発句あづまぶり集。洞海舎涼谷俳諧資料集成。私家版。
 鈴木勝忠・白石悌三校注（1972）俳諧友あぐら。享保俳諧集 古典俳文学大系 11。集英社。
 安井小洒校訂・編（1971）柿表紙。蕉門珍書百種第二巻。思文閣。
 鳥居清・山下一海校注（1970）暁台句集。中興俳諧集 古典俳文学大系 13。集英社。
 斉藤耕子編（1994）卯花筐。福井県古俳書大観続編。福井県俳句史研究会。
 清水瓢左編（1967）春秋稿編次外。葛三全集。葛三顕彰会

文 献

- 後藤好正 (2016) 螢狩の唄を詠んだ狂歌・俳諧. 豊田ホテルの里ミュージアム研究報告書,(8) : 183-190.
- 堀内敬三・井上武士 (1991) 日本唱歌集. 岩波書店 (ワイド版岩波文庫).
- 北原白秋編 (1954) 日本伝承童謡集成第5巻. 三省堂.
- 小林計一郎他校注, 信濃教育会編 (1979) 一茶全集第1巻 (発句). 信濃毎日新聞社.
- 小林計一郎他校注, 信濃教育会編 (1977) 一茶全集第2巻 (句帖 I). 信濃毎日新聞社.
- 前田利治 (1990) 一茶の俳風 (加藤定彦編). 富山房.
- 大場信義 (1988) ゲンジボタル 日本の昆虫②. 文一総合出版.
- 尾原昭夫 (1991) 近世童謡童遊集 日本わらべ歌全集27. 柳原書店.
- 「新編国歌大観」編集委員会編 (1986) 新編国歌大観第四巻私家集編Ⅱ・定数歌編〈歌集〉. 角川書店.
- 宗左近 (2000) 小林一茶. 集英社 (集英社新書).
- 高野辰之編 (1960) 日本歌謡集成 第十二近世編 (改訂版). 東京堂書店.
- 玉城司訳注 (2013) 一茶句集 現代訳語付き. 角川学芸出版 (角川ソフィア文庫).
- 谷川敏朗 (2000) 校注良寛全句集. 春秋社.